飯山市埋蔵文化財調査報告　第23集

岡峰遺跡 III

1990

飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第23集

岡 峰 遺 跡 III

1 9 9 0

飯山市教育委員会

序

飯山市教育委員会
教育長　浦 野 昌 夫

岡峰遺跡は、昭和50年、51年の２回にわたり発掘調査がなされていますが、今回、市の土地開発公社が計画した住宅団地造成にともない発掘調査が実施されました。飯山市は、昭和62年度よりこうした開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が急増しており、開発と文化財保護の調和が重要な課題となっております。

市教育委員会ではこうした課題について、記録保存としての発掘調査はもちろん、より多くの市民の皆様に埋蔵文化財保護の理解を得るため、発掘展や現地学習会等を実施しております。

今回の岡峰遺跡の発掘調査では、調査団長として高橋桂先生に指導をいただき、さらに多くの地元の皆さんの御協力を得まして実施することができました。調査では平安時代の集落跡を中心とした遺構・遺物が出土し、約千年前の祖先の足跡をたどることができました。

本報告書が広く市民の皆様に読まれ、私達祖先の生活を偲ぶとともに地域の将来を考える資料として活用されることを念願いたします。

平成２年３月

例　　　言

1　本書は、長野県飯山市大字常郷字岡峰85番地における岡峰遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、飯山市土地開発公社が計画した住宅団地造成に伴うもので、同公社の依頼を受け平成元年9月5日から同10月31日まで発掘調査を実施した。

3　発掘調査は飯山市教育委員会が主体となり、平成元年度の単年度事業として実施したものである。調査体制はⅠ（7ページ）に掲載した。

4　発掘調査および整理作業参加者は以下のとおりである。

団 長　　高 橋　　桂

担 当　　望 月 静 雄

○綿田茂実・○小川ちか子・丸山澄子・柳まき・稲垣みね・武田利江・山崎満枝・町井まつ・出沢利雄・小林元造・出沢吉重・出沢重忠・鈴木清五郎・阿藤光友・小林勇・望月てる・小林みさを・川谷せん・○坂本房江・小川はる江・上原みつ枝・樋山巌・○青木正子・丸山英徳・○高橋ひとみ・村上花子・○大口千鶴子　　（○印　発掘・整理作業）

5　本書の作成は高橋団長と協議のうえ望月がとりまとめた。執筆分担はⅠ～Ⅲ望月、Ⅳ高橋である。

6　発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関から御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

川谷正則・常盤井智正・県文化課・飯山市土地開発公社・飯山市公民館太田分館・飯山市勤労者青少年ホーム

目　　次

序

例　言

目　次

Ⅰ　岡峰遺跡の調査と歴史 …… 1

　1　遺跡の発見と過去の調査 …… 1

　2　調査に至る経過 …… 5

Ⅱ　岡峰遺跡の地理と環境 …… 8

　1　遺跡をとりまく環境 …… 8

　2　周辺遺跡 …… 8

Ⅲ　調査の成果 …… 11

　1　調査の方法と経過 …… 11

　2　遺　構 …… 17

　3　出土遺物 …… 37

Ⅳ　結　　語 …… 47

Ⅰ　岡峰遺跡の調査と歴史

1　遺跡の発見と過去の調査

岡峰遺跡の発見

岡峰遺跡の存在は、昭和50年に勤労青少年ホーム建設によって明らかになった。当時市教育委員会の小林忠一教育長は、「飯山市岡峰地籍に、青少年ホームが今年建設された。この建設に当たって昨年7月16日から取付道路の工事を開始したところ、土器の破片や住居跡が発見された。飯山市教育委員会は、文化財保護の立場から市長部局、また、勤労青少年ホーム主管課の商工観光課と協議し、建設敷地の緊急発掘調査をすることを計画した。」と記し、また、小林幹男氏は、「岡峰遺跡の発掘の端緒は、飯山照丘高校教諭児玉卓文氏が、たまたま当該地籍の工事計画を知り、工事予定地内の分布調査を行なって、若干の土師器片を採集したことによる。」とそれぞれ発掘調査報告書の中（小林幹男編　1976）で記している。それ以前の分布調査等では、小林幹男氏は「『信濃史料』や『全国遺跡地図』にはもちろん、『太田村史』あるいは最近の刊行になる『飯山の歴史と自然』・『飯山の文化財』、そして『太田の歴史』にも全く記載されていない。」（小林　前掲）と述べているように、市内主要遺跡の約20か所程度取り上げた「飯山の歴史とと自然」や「飯山の文化財」等々は別としても、昭和20年代に行なった「信濃史料」の分布調査時点では確認されていなかった。ただし、昭和14年北条耕作氏が「戸狩岡峰地方モ確カニ遺跡地ナリト考フルモ人家接続シテ探ルニ不便ナル為メ或ハ想像ヲ誤ルヤモワカラズ、然シ真宗寺続キ線上地形上ヨリ推シテ分布上ニ属スト云フモ可ナリカ」（北条　1939）と記しており、すでにこの頃より注意されていた場所であった。なお、昭和45年から開始された飯山北高等学校他の分布調査でも岡峰地籍においては明確な遺物を採集することができず、遺跡と確認するには至らなかった。まさに工事によって、認知された遺跡といえよう。

岡峰遺跡は、現在飯山市Ｎｏ40(旧Ｂ－30)（飯山市教委　1986)、長野県史番号56（県史刊行会　1981）として登録されている。

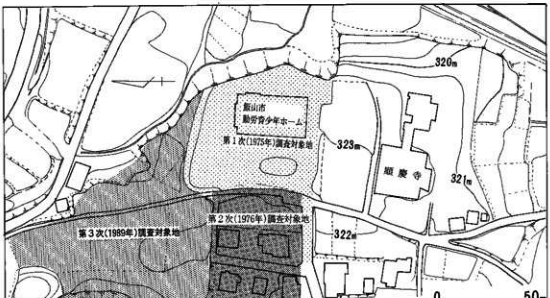

図1　岡峰遺跡の調査（1: 2,000）

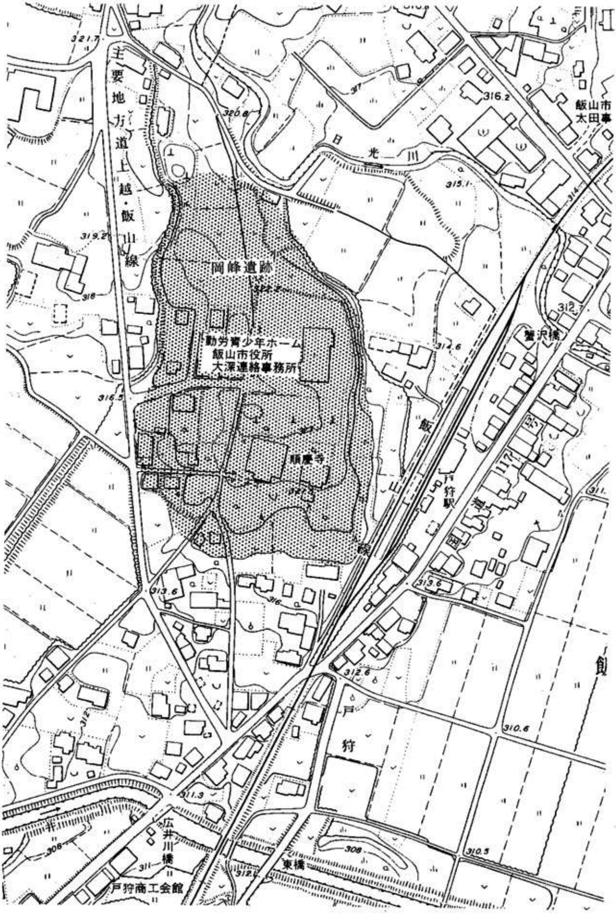

図２　岡峰遺跡の範囲（1:10,000）

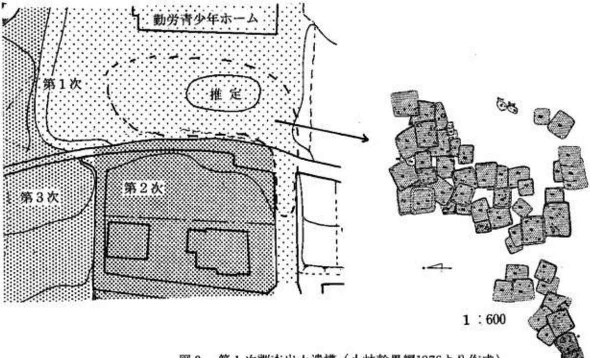

図3　第1次調査出土遺構（小林幹男編1976より作成）

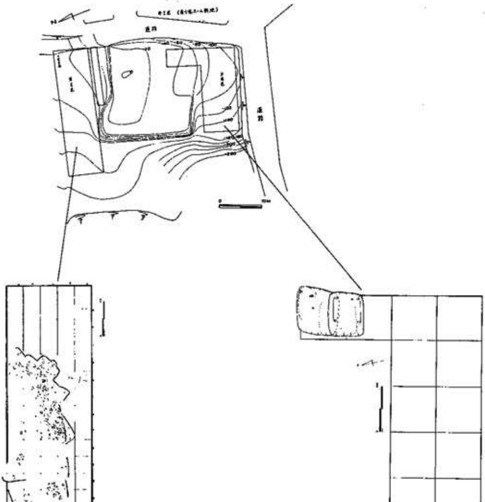

図4　第2次調査出土遺構（児玉卓文編1977より編集）

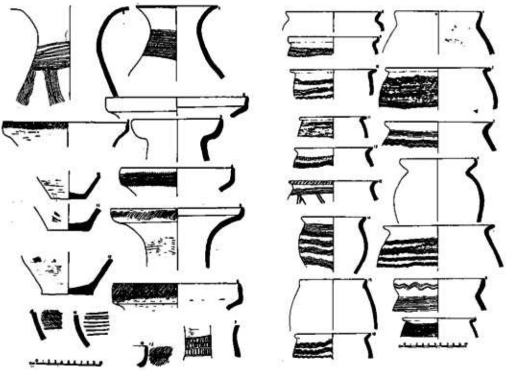

図５　第１次調査出土遺物（小林幹男編1976）

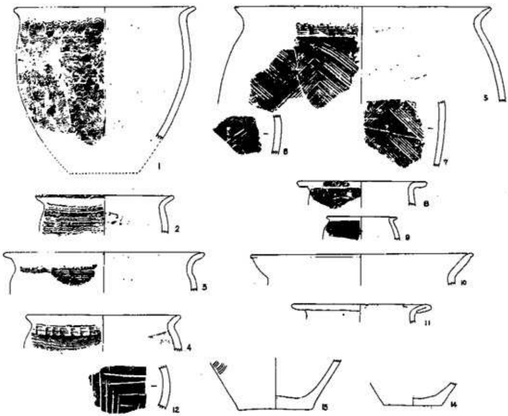

図６　第２次調査出土遺物（児玉卓文編1977）

第１次発掘調査

昭和50年、発見の端緒ともなった前記工事にともない、７月20日・25日～８月３日までの11日間発掘調査が行なわれた。調査は、市教育委員会から委託を受けた岡峰遺跡発掘調査団（団長　小林幹男氏）が実施した（小林編　1976)。　976㎡の発掘調査によって、縄文時代前期竪穴住居址３軒、弥生時代中期竪穴住居址48軒、平安時代竪穴住居址３軒、土坑２基を検出している（図３)。とくに弥生時代住居は 900㎡の範囲内に48軒が複雑に切りあい密集して検出されており、土器型式からも比較的短期間であったにもかかわらず、何軒も切りあっているのは頻繁に建て替えた結果と予測し、「１時期５～６年を出ない単位で、住居の改築が行なわれたことになる。岡峰の住居跡は、柱穴を深くし、床面積を小さくして豪雪に耐えられるように設計されていたが、自然の猛威の前には、たちまち破壊され、移築せざるをえなかったと思われる。」（小林　前掲）と述べている。また、当該時期（中期）の住居形態がすべて方形ないし長方形で、市内他の遺跡で発見される一般的な形態の周溝をもつ円形住居が発見されなかったことも、特異なことといえよう。なお、ほとんどの住居址より炉の焼土が発見されなかったが、このことについても「恐らく住居跡の使用期間が短くて、焼土層の堆積が少なかったこと、融雪の水分が多くて焼土を溶かしてしまったことなどの理由が考えられる。」（小林　前掲）と述べている。

第２次調査

昭和51年、飯山市土地開発公社が勤労青少年ホームの西側に住宅造成を計画し、10月17日から11月14日まで８日間調査が行なわれた。第１次調査と同様に岡峰遺跡発掘調査団（団長　小林幹男氏）が実施した（児玉編　1977)。約 400㎡の調査によって、３基の竪穴遺構等とともに縄文前期・弥生中期・平安時代の遺物が出土している。児玉卓文氏は、落ち込み等の遺構は他にも多く認められているが、前記竪穴遺構をふくめ、明確に竪穴住居址とするには「焼土のないこと、柱穴が確たる規模・構造をもたないことなどから、逡巡を覚えざるを得ない」（児玉　前掲）とされている。また、第１次調査結果についても言及し、竪穴住居における焼土の融解現象や床面の軟弱さなどに疑問を呈している。

以上の２回にわたる調査で、岡峰遺跡は弥生時代中期を中心とした遺跡であること、平安時代の住居も発見されていること、縄文前期の包含層も一部に残っていることが判明した。さらには、地形・地質の複雑さから、自然的なのか人為的遺構なのか容易に判断できないことを指摘された。とくに２次調査において、１次調査結果について密に切りあった遺構について敢えて再検討を行った点は、実証主義の考古学的調査においての基本理念として高く評価されなければならない。実際に今回の調査によって、旧谷状地があったり微高地が存在したり、一見平坦地であるようにみえるが、調査によってきわめて複雑で自然的な堆積が人為的遺構と誤認しやすく、その逆もありうることが再確認された。

２　調査に至る経過

新たな住宅団地造成

平成元年７月13日、市土地開発公社理事長小野沢静夫飯山市長より、埋蔵文化財発掘通知の提出があった。これについて、同７月18日土地開発公社服部局長、市文化財保護審議会委員・遺跡調査団長高橋桂氏・教育委員会渡辺社会教育係長・同係望月で現地視察および協議を行う。公社側では今年度中に造成を行いたい意向であり、発掘調査を至急実施してほしい旨の依頼があった。これに対して市教委並びに高橋氏は、現在続行中の上野・大倉崎遺跡の大規模調査が11月までかかること、これから予定されている公社依

頼の小泉遺跡の発掘調査があり、日程的に厳しいとの話がある。公社側は小泉の工事は、用地買取がはかどっていないため、次年度にしても良いとの回答があり、急遽9月からに予定していた小泉遺跡発掘調査を中止することとし、岡峰遺跡を調査予定に入れることとした。

8月3日、県文化課児玉指導主事の来飯を仰ぎ、改めて現地協議を実施した。工事面積は約4,000㎡で、発掘面積は2,000㎡とすることとし、前述のとおり小泉遺跡のかわりに岡峰遺跡を今年度中に実施することとした。なお、同日付で埋蔵文化財発掘通知（98条2）を提出した。

8月11日付で県教育委員会教育長より、「飯山市岡峰遺跡の保護について」の通知があった。事前に発掘調査を実施して記録保存を計る、経費は事業主体者が負担する、委託先は飯山市教育委員会とする、という内容であり計画書・予算書が示された。

上野・大倉崎遺跡発掘調査は上野遺跡の終盤にかかっており、加えて遺構密度が高く市内遺跡調査団の全員が担当していた。また、小泉へ参加予定の作業員大半も従事していたために、岡峰遺跡の調査に当たっては新たに募集する必要が生じた。岡峰遺跡は常盤地区および太田地区にまたがっており、今回の調査予定地区は太田地区に入っていた。そのため太田地区公民館（太田分館　市ノ瀬分館長）に依頼し、作業員の募集を行った。8月15日付の分館報『太田』第53号に「地区の文化財を学習しましょう　遺跡発掘調査・参加者募集」と題して広く呼び掛けを行った。また、より多くの方の協力を得るために江村大深区長、市ノ瀬分館長、清水・上村両市議会議員の各氏を調査会委員に委嘱し、調査会を設立した。調査の実際については、高橋桂氏を調査団長とし、望月が担当として専従することとなった。

準備は、8月21日から開始した。同29日には重機により表土除去を行い、同31日には調査会を市役所で開催し、調査開始を9月5日とすることなど日程案が了承された。

写真1　調査参加者（川谷正則氏撮影）

飯山市岡峰遺跡調査会組織（平成元年）

顧　問	小野沢　静　夫	飯山市長
会　長	浦　野　昌　夫	飯山市教育委員会教育長
副会長	佐　藤　　清	飯山市教育委員会教育次長
委　員	高　橋　　桂	日本考古学協会会員
委　員	江　村　　好	大深区長
委　員	市ノ瀬　正　人	飯山市公民館太田分館長
委　員	清水　重右エ門	飯山市市議会議員
委　員	上　村　　力	飯山市市議会議員
委　員	服　部　栄八郎	飯山市土地開発公社事務局長
委　員	小　笹　靖　韶	飯山市土地開発公社事務局次長
事務局長	渡　辺　　博	飯山市教育委員会社会教育係長
事務局員	望　月　静　雄	飯山市教育委員会社会教育係
事務局員	樋　山　二二子	

飯山市遺跡調査団

調査団長	高　橋　　桂	飯山南高教諭
担当者	望　月　静　雄	
調査員	常盤井智行・田村視城・高沢秀徳　国道117号線関係遺跡へ）	
作業員	（例言に掲載）	

II　岡峰遺跡の地理と環境

1　遺跡をとりまく環境

遺跡の位置

岡峰遺跡は、長野県飯山市大字常郷字岡峰125番地ほかに所在する。行政区画では大字照里字黒井地籍にもまたがって存在している。ＪＲ飯山線戸狩野沢温泉駅の西側丘陵上に所存する遺跡である。

千曲川の最下流にある飯山盆地は、南北に16km、東西６kmの紡錘形を呈し、盆地底の標高は300～320ｍを計る。盆地のほぼ中央を流れる千曲川によって東西に二分されるが、このうち西側は、飯山市街地北側より飯山市常盤戸狩地区までの、長さ約７kmの長峰丘陵によってさらに東西に二分される。その東側は千曲川の一大沖積地で常盤平と呼称されている。一方、西側は広井川の肥沃な低湿地で、外様平と呼称される。千曲川は飯山盆地を過ぎると、東西の信越を分かつ関田山脈、上信を分かつ三国山脈の傍系連山によってせばめられ、通称『市川谷』と呼ばれるその間を下刻曲流しつつ新潟県へ抜ける。ただし、千曲川の流れる約200ｍ上位には広大な高位河岸段丘面が存在する。

岡峰遺跡は、千曲川が市川谷に入る直前の左岸にあり、長峰丘陵とは広井川によって分断された一連の丘陵と考えられる残丘上に位置する。また、東の千曲川河岸には真宗寺の丘陵、北東の大明神丘陵などと共に同一成因による丘陵と思われ、それぞれ日光川、蟹沢川などによって分断されたものと考えられている。岡峰丘陵は、長峰丘陵と同様に東側が急斜で、西側に緩くなっている。これは千曲川による侵食と思われ、北側も日光川の侵食を受けえぐられている箇所が存在する。西側は丘陵直下に河川が流れているが、これは寛文６年に飯山城主松平忠倶の時、野田喜左衛門によって完成した平用水であり、それ以前は、緩傾斜で外様平北部に接していたものと推定される。

丘陵上には、第１次調査の原因となった飯山市勤労青少年ホームが建ち、南側には浄土真宗の順慶寺がある。また、西側斜面には住宅が建設され、今回の住宅団地造成によってさらに大きく変化しようとしている。

2　周辺遺跡

意外と多い原始・古代の遺跡

岡峰遺跡の位置する常盤・太田地区は、従来からいくつかの遺跡が知られてきているが、それは長峰丘陵上の諸遺跡や大倉崎・上野丘陵、真宗寺の丘陵など特定地域であって、多くの地域で遺物の出土が知られながら遺跡の範囲が明確でないのが現状であった。これは圃場整備事業が市内の他地区より早く、水田地帯がほとんど調査されなかったこと、一方で山地などは開発されず良好に保存されていたため発見されにくかったことの両方に起因している。しかし、過去の文献や分布調査を通してみるとむしろ他地区より多い傾向が伺える(図７)。本稿では比較的多い弥生時代の遺跡立地について触れることとする。

岡峰遺跡周辺の地理については、前項で触れているが、大きな特徴として東側は大河千曲川によって画されていること、長峰丘陵の北端周縁部であること、西側に広井川の肥沃な低湿地外様平の北部が広がること、北側は盆地端部にあたり徐々に標高を増していくこと、そして最後に長峰丘陵と盆地端部の間に微高地が存在し、広井川・日光川・今井川によりそれぞれ開析されていること、以上が本地域に立地した遺跡の環境である。いまこの地域の遺跡立地をブロックで分ければ、広井川以南の長峰丘陵上の遺跡群（１

図7　岡峰遺跡の位置と周辺遺跡分布図（1:10,000）

～３)、日光川周辺の遺跡群（４～８)、今井川周辺の遺跡群（９～13）の３群に分けられる。

長峰丘陵上の遺跡

長峰丘陵上の遺跡は、照里小学校（１)・光明寺前（２)・照丘（３）がある。なお、これらの遺跡は、建物建設や道路工事にさいして部分的に調査がなされたのみであって、厳密に１遺跡として区分されている訳ではない。したがって、一時期１～３まで同一遺跡の場合もあろうし、１遺跡の半分が他の遺跡と同一になる場合もでて来よう。現時点では各遺跡が明確となっていない以上、いたずらに分離・併合することはかえって混乱の元になるので、それぞれ発見の経緯を尊重し、将来の課題としておきたいと思う。

掲載地図では分からないが、南へさらに５㎞断続的に遺跡の分布があり、弥生時代の大遺跡として注目されている小泉遺跡群も約10万平方米の範囲を有して存在している（飯山市教委　1989)。これら一連の遺跡は一部旧石器時代の遺跡を除けばすべて弥生・古墳時代であり、長峰丘陵が生活の舞台となったのは、外様平に生産の場を求めた弥生時代になってからと考えられる。また、常盤平側に面した部分には狭小な河岸段丘が認められる。この面にも排水路工事などで土師器片が出土しており、弥生時代以降部分的に居住し、常盤平の一部が生産の場として開拓されていったことが伺える。

日光川流域の遺跡

飯山平の北端を形成する平地である。徐々に南に傾斜しているが、岡峰遺跡（４）の西側が広井川の形成した低湿地で、集落ののる微高地の北側が今井川の扇状地である。この流域には岡峰遺跡のほか、真宗寺裏（５)、中山（６)、大深（７)、五庁（８）がある。いずれも微高地上に立地する。このうち真宗寺裏遺跡のみ弥生時代を欠如しており、また、蟹沢川流域というよりも千曲川に面する独立した遺跡である。

なお、すでに圃場整備事業によって多くが破壊されてしまったが、日光川の扇状地上の水田より弥生時代の遺物が多く発見されたとのことであり、太田地区にある緑の村管理センターにも該期土器・石器が展示されている。

今井川流域の遺跡

もっとも遺跡の分布が不明確な地域である。五庁東（９）と割山（10）はそれぞれ川に面した段丘上に存在している。低湿地も広がり、初期水稲耕作を営むには適した場所であったろう。なお、10は中世今井館跡で、11・12の千駄坊南・千駄坊は、縄文時代の遺跡である。

本稿で弥生時代について特に触れたのは、この地域が現在確認されている長野県最北の弥生時代遺跡集中地帯であるからである。これより北に該期遺跡が認められないのは、千曲川峡谷地帯で一定の水稲耕作を営むに足りる平坦な低地を持たないこと、豪雪地帯であり初期水稲耕作に適さなかったこと等が考えられている（高橋　1977)。

それでありながら、この地域にいち早く弥生時代中期から痕跡が認められるのは、本地域までは水系や低湿地の存在が水稲耕作に適した環境であり、さらに新しい生産技術を受け入れる素地があったからと考えられる。

Ⅲ　調査の成果

1　調査の方法と経過

調査方法

開発区域は、戸狩駅付近までの１万平方米以上に及ぶものであるが、青少年ホーム以東は日光川の氾濫源及び低湿地であり土盛り工事を実施することとなっている。大きく削土される部分は主要地方道上越・飯山線より約50ｍ導入された引込線道路の南側であり、第２次調査地点に挟まれた約3,000㎡である。また、新設道路北側は農地として開発区域内には入らないが、道路建設によって大きく段差がつくことから、地権者との協議で斜面に削平することになっていた。そのためこの部分が約1,000㎡で、計4,000㎡が調査対象となった。

１次調査の結果では、今回の調査地区は遺跡範囲の北端よりさらに北の外れた地区と推定されていた。実際の表面踏査でもほとんど採集できなかった。そのため、遺跡の範囲を確かめること、土質の複雑な地域でありこれら遺構の存在を明確にすることを目的として調査に取りかかることとした。

調査区画は、土地開発公社作成の500分の１の地形図をもとに、コンクリート製境杭を基準としトランシットで磁北にＹ軸、東西にＸ軸を設定した。基本となった境杭はＡ－１東南杭である。グリットは５ｍ方眼とし、座標の第３象限を使用してＸ軸を１～、Ｙ軸をＡ～とした。表土はバックホーで除去した。耕作土は道路北側の新たな耕作地へ入れるため、南側から順次除去していった。なお、Ｅ・Ｆ・Ｇ－６・７・８・９付近は頂部であり、すでに削平された痕跡が認められたために一部残土置場とした。

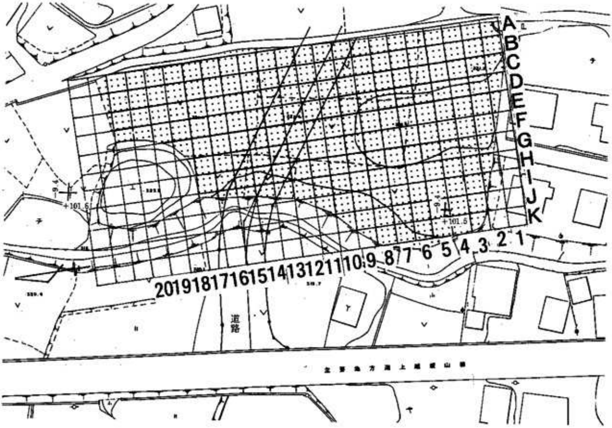

図８　岡峰遺跡グリット設計図）1:1,000）

調査の経過

月　日	曜日	主　な　作　業	特　記　事　項	そ　の　他
9月 5	火	C～1－2～6区精査　D・E－3・4区より住居址確認（H1住）	地形複雑	調査開始式
6・7	水	雨天中止　7日　一時作業		
8	木	B～D－10まで精査　H2住確認		
11・12	月 火	H～1・3～5区調査 H－5焼土出土	H1住土器片多い	かわら版岡峰1号発行
13	水	J－5ピット着手　F－4掘り下げ	J－4区完形坏出土	
14	木	午後作業　D－2土器出土遺構予想		かわら版2号発行
18	月	H1・2住遺物分布図着手		午後雨　土器洗浄
20	水	B～D－2・3調査　丘頂調査		午前雨　中止
21	木	H1住10分の1微細図完了　I・J－5区平板測量（H7住）		かわら版3号発行 夕刻　懇親会
22	金	雨のなか作業 H1住レベリング完了		戸狩小3年見学　同歴史クラブ作業援助
25	月	H・1－5・6遺物取り上げ	H1住さらに遺物出土	
26	火	H1住最終遺物取り上げ・平面図完了　セクション実測　C－2区焼土セクション	B－6付近　溝検出	市ノ瀬調査委員視察 かわら版4号発行
27	水	H1住セクション取り外し　溝調査 I－5（H7住平板測量）		
28	木	溝の拡がりを追う		

写真２　調査開始式

写真３　調査区作業風景（南側）

29	金	溝調査続行　黒色土で確認困難　H－7住カマドセクション実測		
10月 2	月	B・C－7溝調査		かわら版5号発行
3	火	溝（B－4・5、D－2）調査　B・C－7～10区続行		午後3時より雨のため土器洗浄作業
4	水	B－3・4完掘　溝の調査続行		瑞穂分館服部主事来跡
5	木	B－8付近で縄文土器片出土　B－4～6溝平板測量		
6	金			
9	月	B・C－7～10溝平面図実測		かわら版6号発行
12	木	2号掘立平面図測量		
13	金	B・C－9～12　溝を中心に全体図実測		
16	月	B・C－9～12全体図実測		
17	火	天気不順　北半の調査続行 午後学習会および土器洗浄作業		かわら版7号発行 現地見学会
18	水	久し振りの好天気		
19	木	7ライン以北全体測量		
20	金			
23	月	C－14～18調査　部分的に谷状地黒色ありが深い	E－15土壙墓検出	かわら版8号発行
24	火	土壙墓掘り下げ		

写真４　調査区作業風景（北側）

写真５　谷状地土層堆積状況
H１住西側谷頭地。平安時代の遺物は上層のみから出土しており、該期にはすでに埋没している事実が認められた。

25	水	E－区北へ急斜となる　C－18まで 精査　土坑墓平面図実測F－14		
26	木	土坑墓周辺精査　E－14～17調査		
27	金	北半平板測量　H４住カマド実測		かわら版９号発行
30	月	F－13出土H３住調査　溝調査		
31	火	F－13出土H３住調査　溝調査完了	調査終了	かわら版10号発行

以上、調査日数約30日で3000㎡を調査した。

写真６　調査区北半作業風景
白っぽく見える部分は地山の黄褐色土層。黒く見える部分は、黒色土の厚い箇所で、特に溝の検出には確認に困難であった。

2 遺　構

今回の調査によって検出された遺構は、竪穴式住居址８軒、掘建柱建物址２軒、土坑２基（内土坑墓１基）、溝７本、ピットである。出土遺物からすべて平安時代の所産と考えられる。

調査区内のほぼ中央に丘頂部があり、この部分は耕作土直下が青色乃至白乳色粘土質層であり、すでに削平されていると考えられた。住居址はこの丘頂部の南北に位置し、東側に長く溝が走っている。以下に各遺構別に説明することとする。

竪穴住居址

Ｈ１号住居址（図15・写真７・８）

Ｃ・Ｄ－３・４区に位置する。黄褐色土層を掘り込んで構築されている。一辺230cmのほぼ方形プランを呈する。床面は堅致であるが、凹凸があり平坦ではない。カマドははっきりしないものの東南コーナー際に土器などとともに焼土層があり、付近に大型の焼石なども存在するところから、石組カマドが破壊されたものと考えられる。柱穴は壁および床面上に掘り込まれている。遺物は東南の部分に集中して出土している。黒色土器坏、甕などがあり、平安時代に位置づけられる。

Ｈ２号住居址（図16・写真９・10）

Ｇ－５区を中心として検出される。丘陵頂部に近いため削平されており、東北コーナーを中心とした一部のみの検出に終っている。焼土は東壁際のピット周囲より検出されているが、特別な施設があった痕跡は認められなかった。柱穴は多数あるがすべて本住居に付属するものとは考えられない。なお、床面は東北コーナーを除き削平されているため、残っていない。

遺物は、須恵器破片が若干出土した。

Ｈ３号住居址（図17・写真11・12）

Ｆ－13・14区に位置し、溝７に切られる。300×250cmの不整長方形プランを呈す。黄褐色土層に掘り込まれているが西壁は明確でない。カマドは東北コーナーよりの東壁に構築されているが、わずかに石組が残る程度で破壊されていた。柱穴は４本検出され、P_3はややカマドに近いが主柱穴と考えられる。

遺物は、カマド付近を中心として出土している。

Ｈ４号住居址（図18・写真13・14）

Ｇ－14・15区に位置する。溝に囲まれるように存在し、北側は溝と接している。西側が調査出来ない地区であったため、約半分の検出で終っている。規模は320cmを長辺とする長方形プランと推定され、黄褐色土層にしっかりと掘り込まれる。カマドは、東北コーナーに構築され、１・３号住居とは相違している。柱穴は７本検出されたが主柱穴と考えられるのは　だけである。なお、P_5とP_6は柱穴というよりも、住居内貯蔵穴的なものと判断される。床面はしっかりしており、部分的に貼床も認められる。なお、焼土が２か所床面上に検出されている。

遺物は、カマド内・床上より土師器片が多く出土している。

Ｈ５・６号址（図19・写真15）

Ｈ４号住居址の南側に位置する。西側は耕作のため調査不可能地であったため、一部の検出に留まっている。切りあい関係は、Ｈ６号住居址をＨ５号住居址が切って構築しており、Ｈ５号住居址が新しい。さらにＳＫ５がＨ５号住居址を切っているところから、Ｈ６号住居址→Ｈ５号住居址→ＳＫ５と新旧過程を指摘できる。Ｈ５号住居址は一辺が330cmの隅丸長方形プランと思われる。南側に焼土が認められ、カマドの可能性もあるが、調査地区外に延びていたため明確にし得なかった。床面は、しっかりと黄褐色土層に掘り込まれてほぼ平坦にされている。壁もほぼ垂直に掘り込まれ、掘り込み面は明確である。

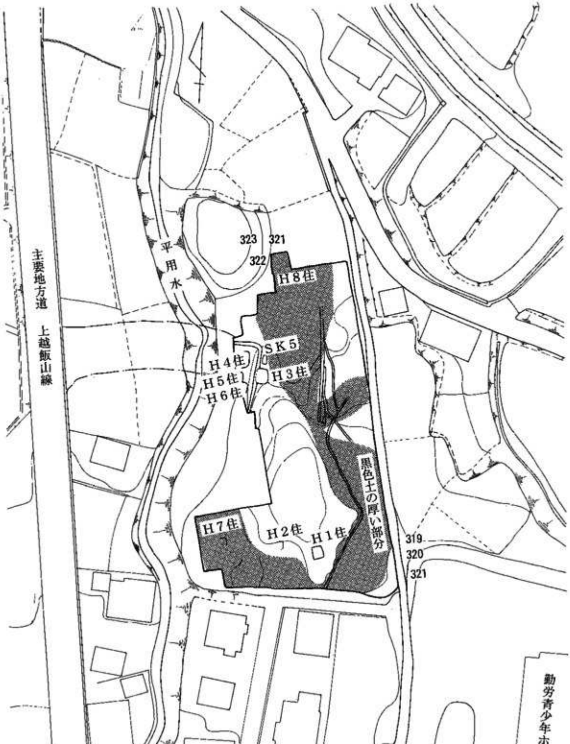

図9　主要遺構と微地形（1:1,000）

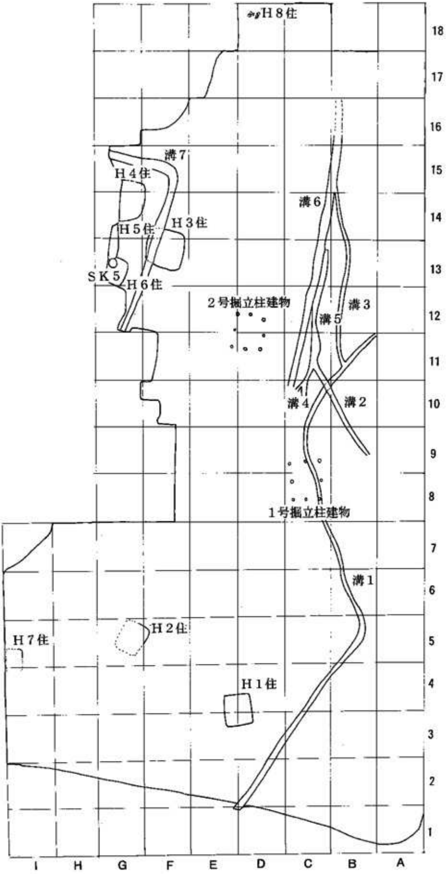

図10　遺構全体図（1:500）

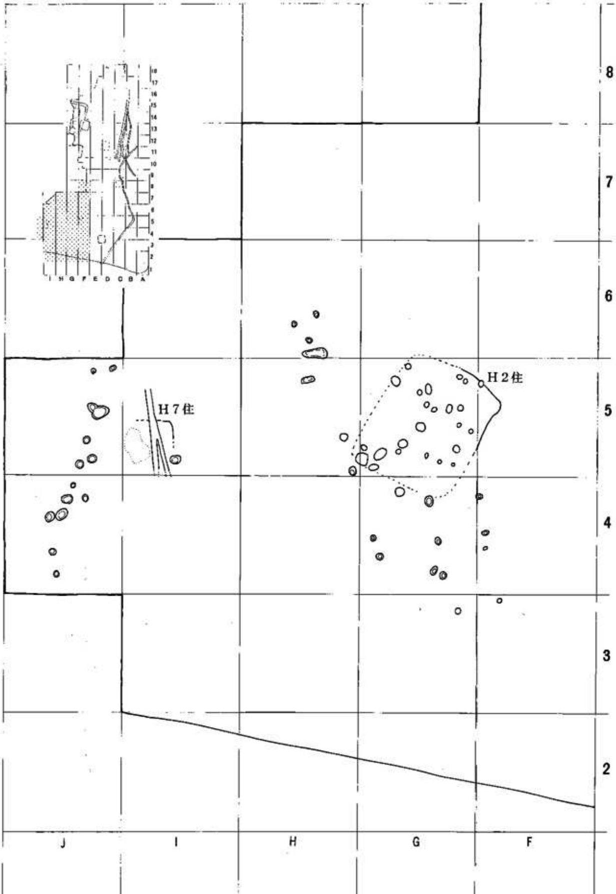

図11　遺構分布図－１－（1:60）

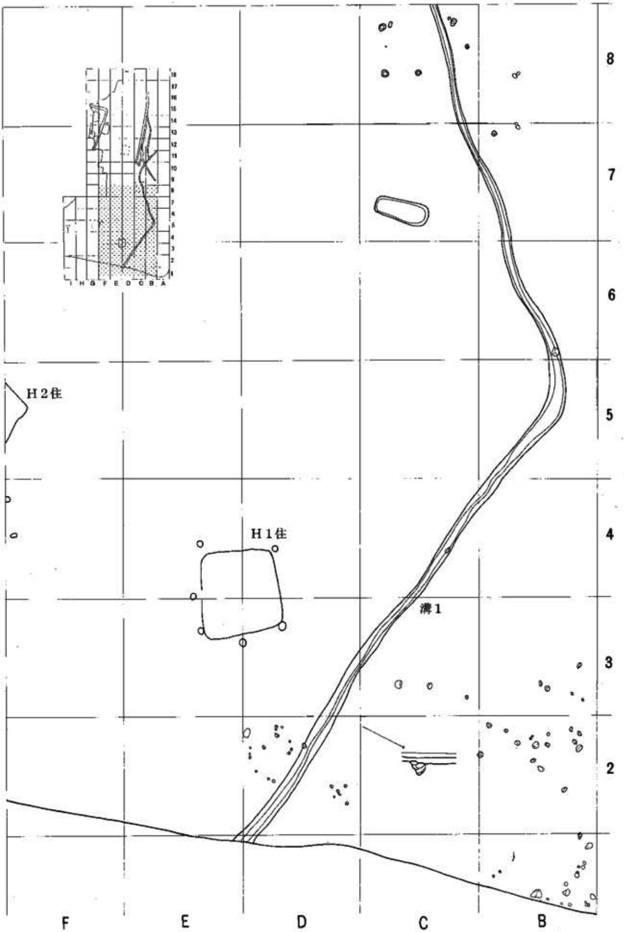

図12　遺構分布図－2－（1:60）

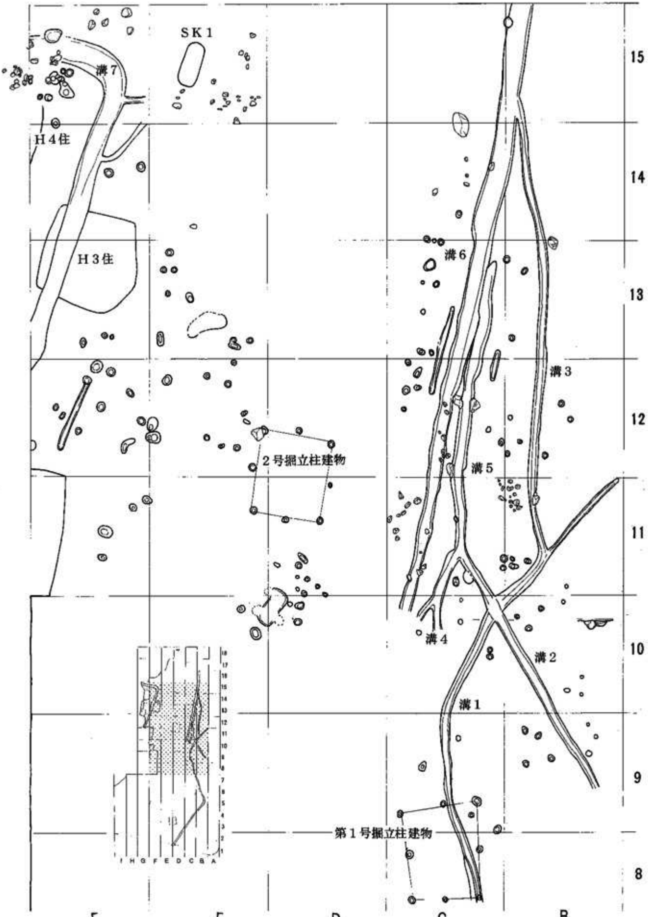

図13　遺構分布図－３－（1:60）

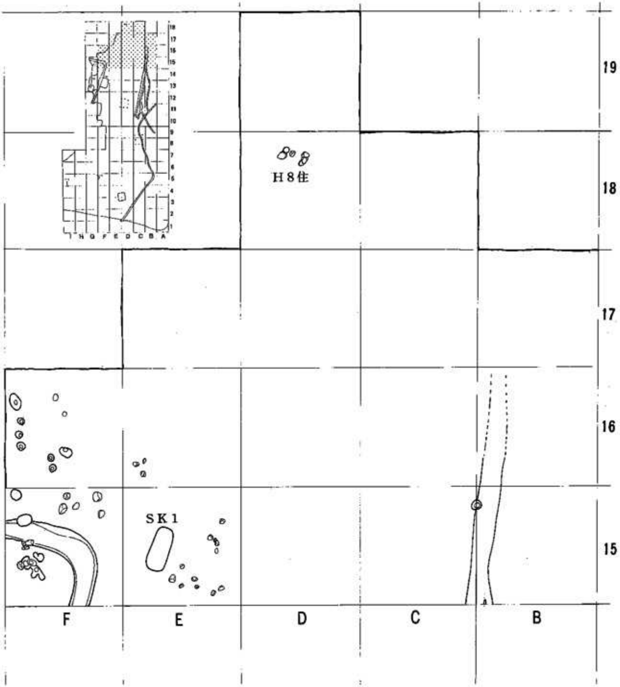

図14　遺構分布図－４－（1:60）

遺物は、Ｈ５号住居址より土師器片が多く出土した。

Ｈ７号住居址（図20・写真16・17）

Ｉ－５区で出土したカマドと貼床が認められた部分であり、プランははっきりしていないが住居址と考えたものである。トレンチャーにより破壊されている部分もあるが、カマドから貼り床部分にかけて土師器坏が多く出土した。貼床は焼土を多量に含む固い褐色土で、厚さは約２cmであった。本地域は黒色土層が厚く堆積している箇所であり、住居は黒色土に掘り込まれて構築されている。

Ｈ８号住居址（図21・写真18）

Ｄ－18区で出土している。カマドのみのため住居としてよいのか躊躇する。遺物もカマド内のみのため、単独施設かもしれない。カマド内には焼土が認められた。

土　坑

土坑は１～５までナンバーリングしたが、明確に遺構と断定できるのは１と５のみである。

ＳＫ１（土坑墓）（図22・写真19・20）

Ｅ－15区に存在する。長さ190cm、幅80cmの隅丸長方形プランを呈し、確認面からの深さは15～20cmを計る。坑底は、斜面の高い南側が深く掘り込まれる。遺物は長軸の北側部分に、土師器坏形土器が3点(内中央の土器は黒色土器）が口縁端がやや重なるように正位の状態で並置されており、底面より５cm浮いた状態で出土している。

坑内は西側部分に拳大ほどの礫がややまとまって出土している。ただし、その出土状態は意識的に設置したとは考えられない。

遺構の南側には配石のように数点の礫が認められた。本土坑墓と関係するものかもしれない。

ＳＫ５（図24・写真21）

Ｈ５・６号住居址を切って構築されている。100×115cmの楕円形プランを呈し、深さは約40cmを計る。坑内には、人頭大の石が計13点入っている。土器などの遺物の出土はなかった。

掘立柱建物址

１号掘立柱建物址（図25）

Ｄ－８区に位置し、溝１を切って構築されている。２間×２間の規模で、柱間寸法は桁行が約3.8ｍ、梁行が2.9～3.1ｍである。中間寸法はそれぞれ1.9～2.1ｍ、1.4～1.7ｍである。

２号掘立柱建物址（図25・写真22）

Ｃ－11・12区に位置する。２間×２間の規模で、柱間寸法は桁行が約3.5ｍ、梁行が3.0ｍである。中間寸法はそれぞれ1.5～1.8ｍ、1.4～1.5ｍである。１・２号ともやや不揃いである。

溝（図12～14・写真23～25）

溝址は、調査区の東側および北西側において検出されている。このうち東側で検出された溝は１～６までの６本である。これらの新旧関係は溝１が溝２によって切られていることが判明しているが、他はセクションでは判断出来なかった。溝１は全長45ｍ検出され、溝３が別れ溝６に接続する。この同時性については不明である。溝２は溝４と接続し、溝５となる。溝５・６の切りあいも不明である。西北側の溝７はＨ３住をきる。傾斜は、溝１～６は南側深度を増しており、１の最大の深さはＤ－２区で約100cmを計る。他は10cm～25cmである。

遺物は、ほとんど出土しなかったが、平安時代と推測される。

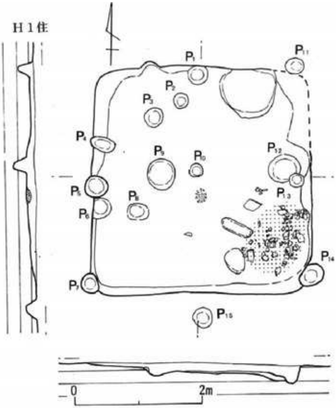

図15　H 1 号住居址（1:60）

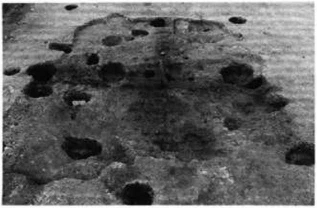

写真 7　H 1 住遺構

写真 8　H 1 住遺物出土状況

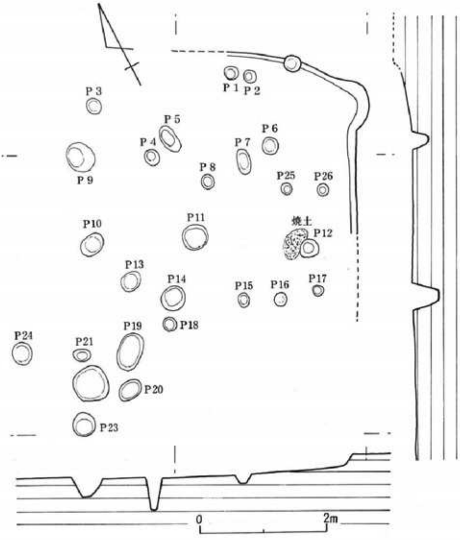

図16　H 2 号住居址（1:60）

写真 9　H 2 住遺構

写真10　H 2 住調査状況

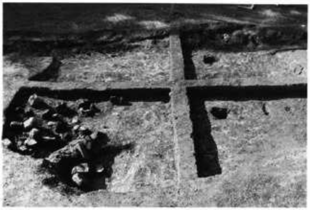

写真11　H 3 住遺構

写真12　H 3 住遺物出土状況

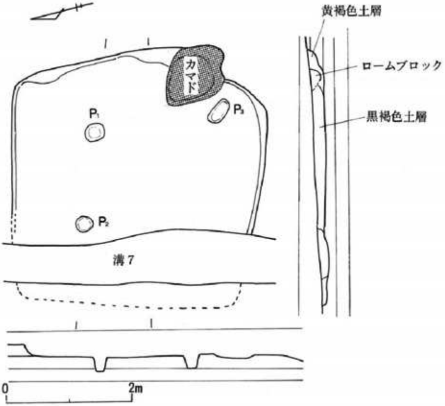

図17　H 3 号住居址（1:60）

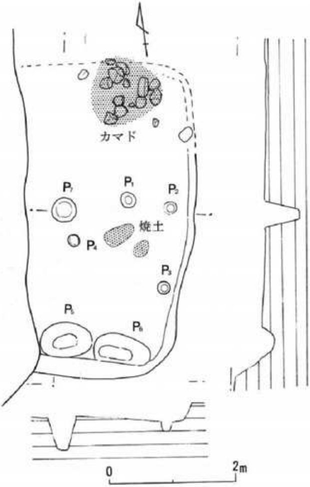

図18　H 4 号住居址（1:60）

写真13　H 4 住カマド

写真14　H 4 住遺構

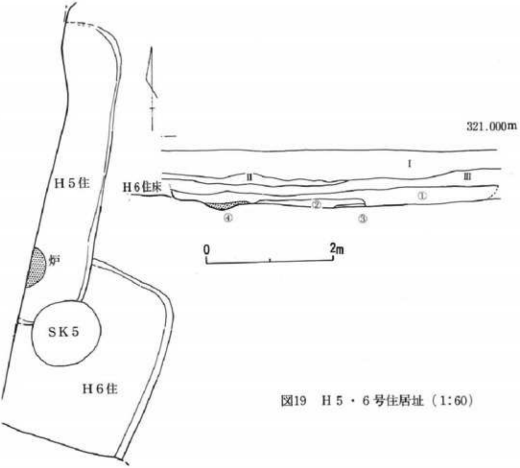

図19　H５・６号住居址（1:60）

写真15　H５・６住遺構　　耕作のため一部のみの検出にとどまった。

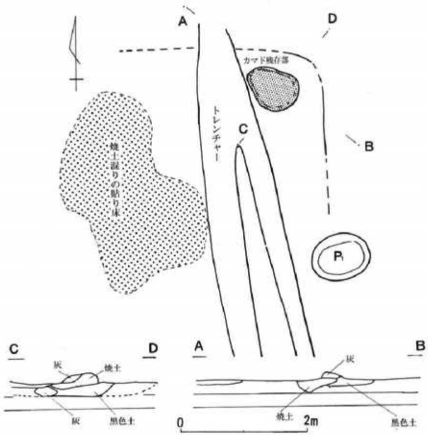

図20　H 7 号住居址（1:60）

写真16　H 7 住

写真17　H 7 住カマド

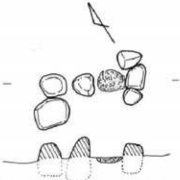

図21　H 8 号住居址カマド（1:40）

写真18　H 8 住カマド

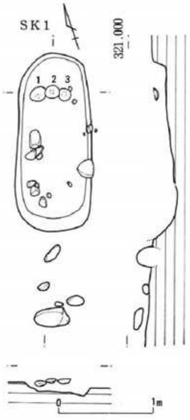

図22　ＳＫ１（土坑墓）（1:40）

写真19　土坑墓

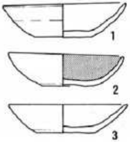

図23　ＳＫ１（土坑墓）出土土器（1：4）

写真20　土坑墓

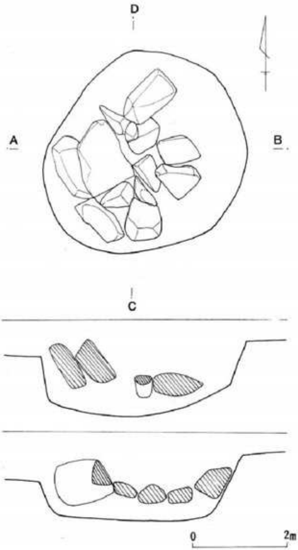

図24　ＳＫ５（1:20）

写真21　ＳＫ５

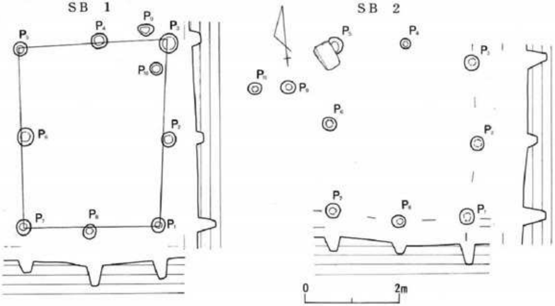

図25　掘立柱建物址（1:80）

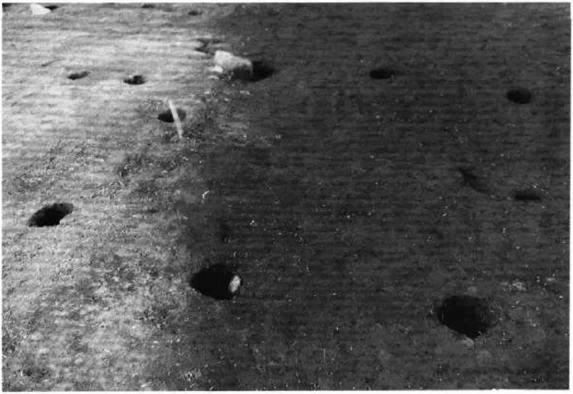

写真22　2号掘立柱建物址

写真23　黒色土中における溝址確認状況 1

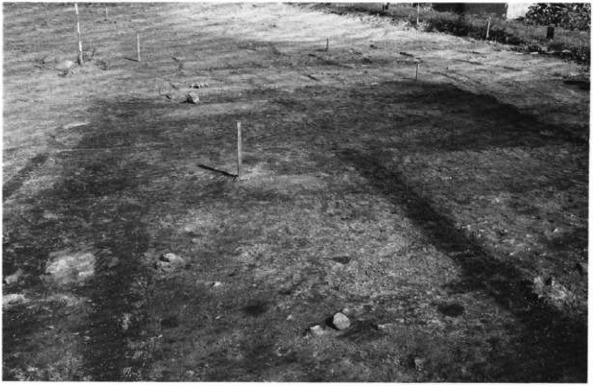

写真24　黒色土中における溝址確認状況 2

写真25　溝址
（曲がりくねりながら続くこの溝は、おそらく排水的機能が考えられる。）

検出された遺構について

調査区における微地形は、Ｅ－９区付近を頂点としてあらゆる方向に傾斜していた。その低くなった部分においては黒色土が厚く堆積していたが、少なくとも平安時代においてはほぼ平坦な地形を呈していたと考えてよく、黒色土の厚いところでも遺物は比較的上面からの出土であって、やや下面ないしは同一レベルより縄文土器の出土がある。したがって、こうした地形はかなり以前に形成されたもので、１次調査で指摘されたように、もちろん黒色土中に住居が構築されることもあった。これは、当該時期にすでにほとんど埋没していたために、居住するに不適ではなかったことを示している。地山の黄褐色土まで例えばＨ７号住居で１ｍ以上あることを考えれば、わざわざ黄褐色土を用意して貼床せざるをえなかったことは至極当然のことといえる。１次調査で指摘されたように豪雪地ゆえに融雪の水捌を良くするためわざと黒色土中に床を設けたのではない。また、急斜面ではありえても、指摘されるように住居内焼土も雪解け水で流れて無くなることもありえない。かかる事例は豪雪地に対する一種の過大評価である。こうした黒色土中に住居床面を作る事例は、岡峰の如く特別な地形・地質状態の場合などに限られ、その場合でもさらに貼床されるかそれに準じた方策が取られている。市内一般事象として居住施設を構築する場所は、大抵黒色土の薄い微高地上に黄色褐色土層を掘り込んで営まれている。

さて、検出された遺構は全て平安時代に属するものであった。今回の調査区においては弥生時代の遺構は全く検出されなかった。１次・２次調査の地区が弥生時代が中心であったことを考えると、今回の調査区までは弥生時代の居住範囲が及んでいないことが明らかとなった。平安時代の遺構は、１次で３軒の住居址が切りあって出土しているのみである。今回の調査でも遺構の密度は低く、平安時代の集落と呼ぶにはやや希薄な感じを受ける。住居址についても、貧弱な感じを受ける。１号住居址については唯一全体を明らかにし得たが、土器破片なども多く出土した割合に遺構がしっかりしていないのが気にかかる。特別な竪穴住居であった可能性もある。それは、溝址や土垢墓の存在と併せ今後の研究課題としたい。

写真26　遺 構 測 量

3　出土遺物

縄文時代の遺物（図24）

縄文時代の土器・石器は、遺構に伴って出土したものはなく、黒色土の厚い旧谷状地より主に出土している。まとまって出土した状態ではないが、特にD－12・13区付近より多く出土した。総点数は約100点で、有文土器は多くはない。以下に特徴的な土器について説明を加える。

1は前期に属する土器で、竹管状工具で渦巻文が施される。2は縄文地文に竹管の平行線文がB字状となるもので、胎土に金雲母を含む。中期前半の土器であろう。4～16は、後期後半～晩期初頭に位置づけられると思われる土器である。5・6は頸部から立ち上がる壺形土器の破片と思われる。縄文地文に磨消手法、また、棒状工具により三叉状・入組状文が施される。晩期初頭に位置づけられると考えられる。8・9は綾杉状の沈線が施される。後期後半に位置づけられようか。11は無文の粗製土器。13～16は縄文が施される。14のみ中期かもしれない。17・18はいわゆる網代の底部である。17は2本越え1本潜り1本送り、18は1本越え1本潜り1本送りである。

15～22は縄文時代所産と考えられる石器である。19は砂岩製の打製石斧で基部側を欠く。20は石匙。前期に特徴的な三角形の形態で、石材は軟質の頁岩が用いられている。22・23は安山岩製の剥片である。
21は左側縁に使用痕が認められ、利器として使用されたものと考えられる。

平安時代の焼物（図25）

出土した土器の種類には、窯で還元焔焼成した灰色を呈する須恵器、素焼きで酸化焔焼成の土師器（このうち炭素を吸着させて黒色に仕上げているものを、黒色土器と呼ぶ）、灰釉のかかったいわゆる灰釉陶器がある。

また、用途別では食器としての坏・椀・蓋、煮沸用具の甕・鍋・甑、貯蔵用の長頸壺がある。平安時代に使用された種類からみれば少ない。各遺構別に説明を加えることとする。

H1号住居址出土遺物（図27）

土師器坏形土器が4点出土している（1～4）。1～3は黒色土器で、4は処理されていない。いずれもロクロ調整されており、底面切り離しは回転糸切りで、そのうち2は、回転ヘラ削り調整、他は手持ちヘラ削り調整が成されている。5は小型の甕形土器で、表面はロクロナデ調整が施される。器高は、15cmを計る。6～8は甕形土器で、いずれも胴上半部から口縁部にかけての土器のみ図示した。口縁が緩く外反する器形を呈し、器表面にはロクロナデが施される。11は甑で、ほぼ直立する胴上部に2か所の把手がつく。焼成は悪い。11は須恵器長頸瓶である。頸から上部を欠き、胴上部から底部にかけて全周を遺存している。底部は高台がつけられ、回転糸切り痕をわずかにとどめる。胴部下半は回転ヘラ削りがなされる。

H2号住居址出土遺物（図27）

出土遺物は少ない。12～14は須恵器の甕形土器破片、格子目の叩調整が施される。15は土師器の小型形土器で胴中央部を欠く。ロクロ調整が施され、底部および周辺にはさらにヘラ削り調整が行なわれる。焼成は悪く、胎土には砂粒を混入する。

H3号住居址出土遺物（図28）

甕形土器破片が多く出土したが、図化できる資料は少ない。16・17は、黒色土器の坏形土器である。16

写真27　石匙出土状況

写真28　Ｈ１住内坏出土状況

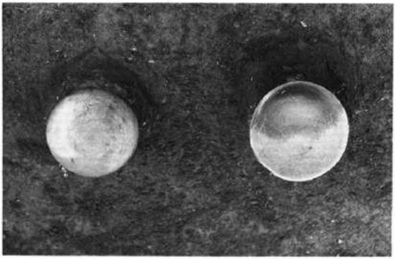

写真29　Ｃ－２区坏出土状況

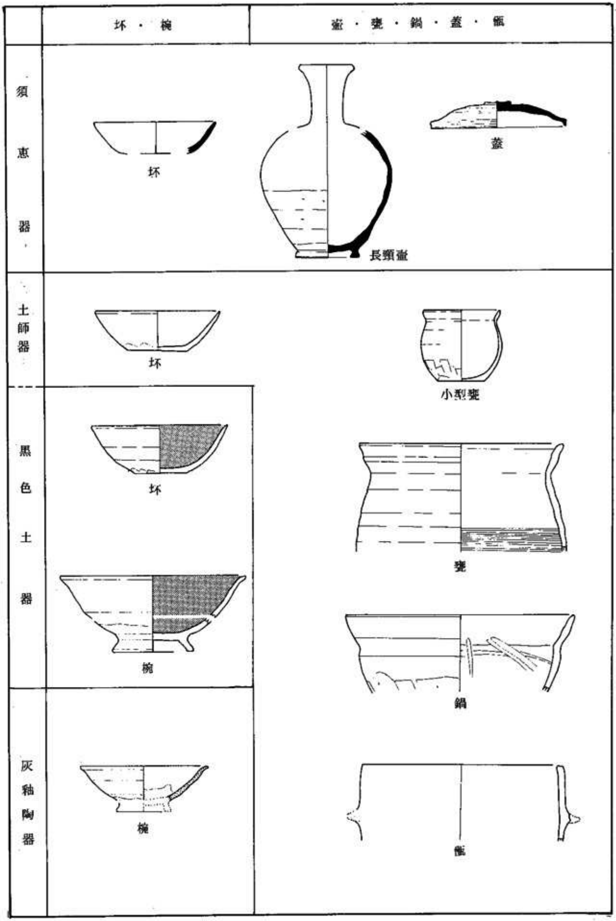

図26　岡峰遺跡出土平安時代の焼物種類（1：4）

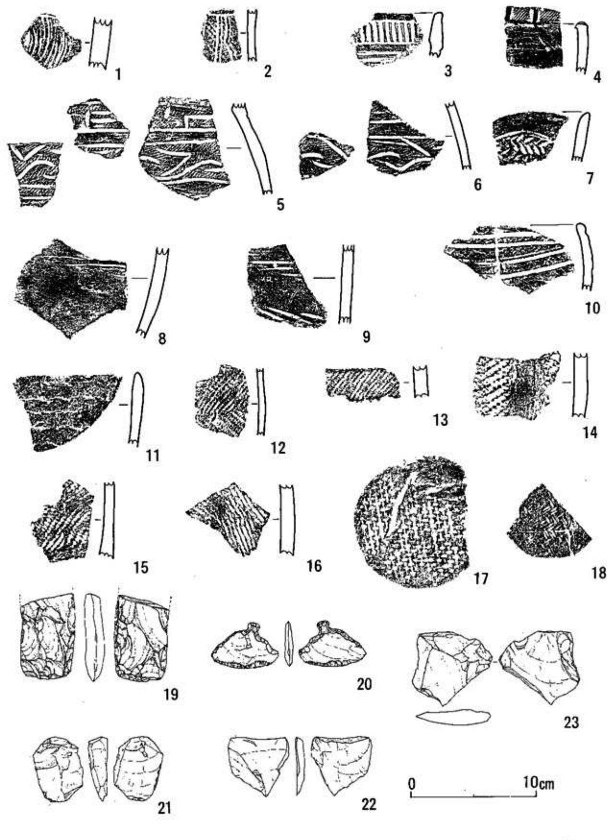

図27　縄文時代の遺物（１：３）

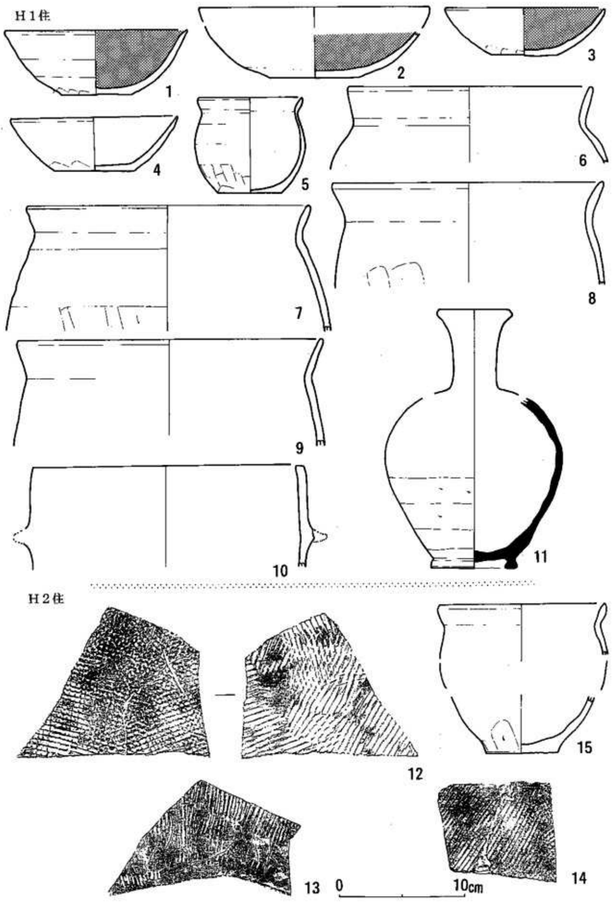

図28　平安時代の土器１（１：３）

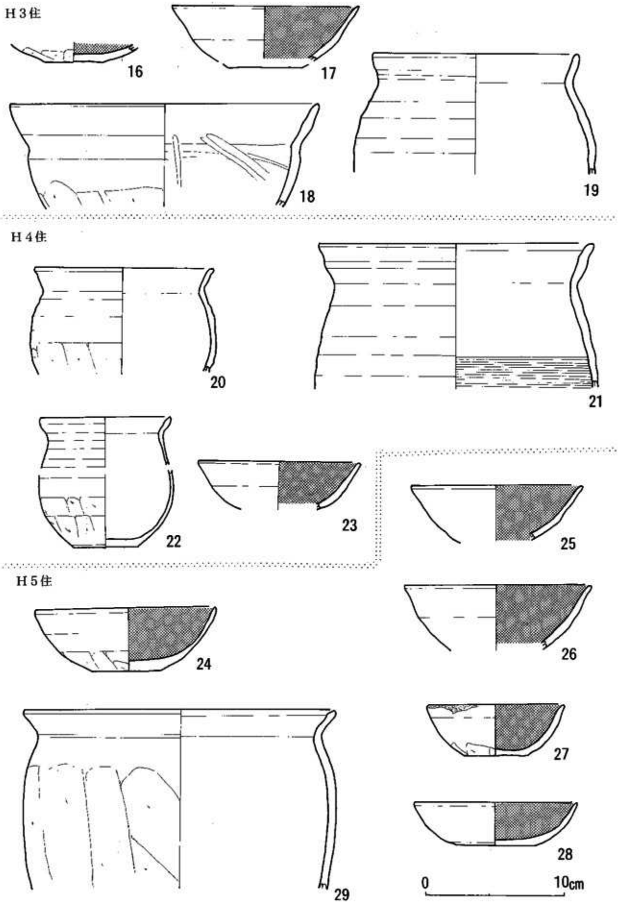

図29　平安時代の土器２（１：３）

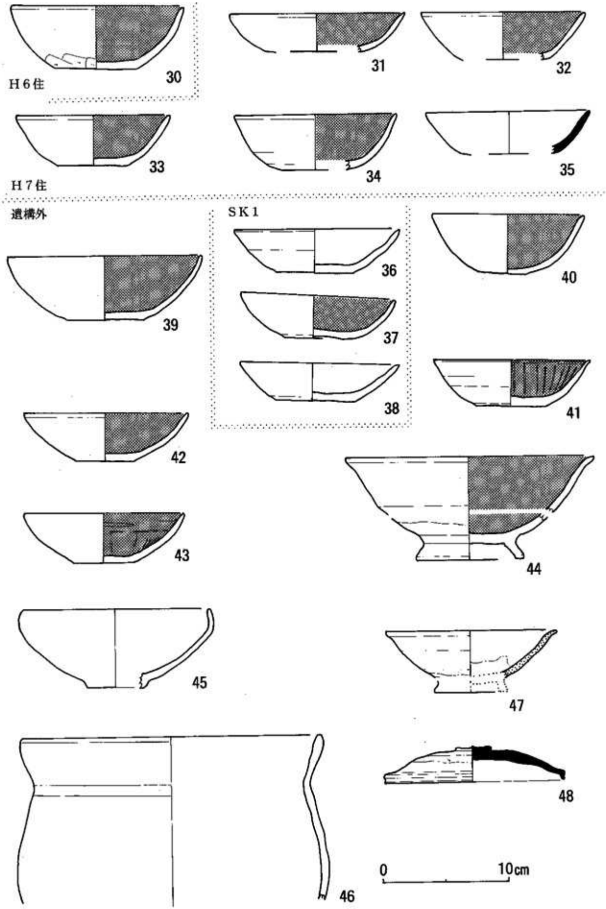

図30　平安時代の土器３（１：３）

の底部にはヘラ削りが施される。17は底部を欠くが、胴中央部がやや膨らみ口縁部が外傾している。18は鍋形土器で、器種としては珍しい。頸部がくびれ外傾する形態で、内外面ともロクロ調整、さらに内面にはヘラ撫でが行なわれる。外面胴部下半はヘラ削り調整。19は、ロクロ調整の甕形土器で、最大径を胴部中央におく。

H 4 号住居址出土遺跡（図28）

土師器　形土器・黒色土器杯形土器が出土している。20・22はロクロ調整の小型　形土器で、胴部下半にはヘラ削り調整が施される。23は、内面が黒色処理されている。

H 5 号住居址出土遺物（図28）

黒色土器杯形土器・土師器甕形土器が出土している。24はやや内湾する器形を呈し、口径14.6cm、器高 5 cm、底径5.2cmをはかる完形品である。26・27はやや外反する形態を示す。28は器高 3.4cmと低い。以上の黒色土器で底部の確認できた24・27はヘラ削り調整され、28は回転糸切り痕をとどめている。29は甕形土器で、口縁部がやや内屈する形態をとる。『越後型』と呼称されるもので、頸部以下はヘラ削り調整が施される。

H 6 号住居址出土遺物（図29）

図化できるものは黒色土器 1 点のみである。口径13.7cm、器高 4.9cm、底径 6.4cmを計る。底部はヘラ削りが施される。

H 7 号住居址出土遺物（図29）

すべて杯形土器で、他の種類は出土しなかった。31～34は貼り床直上よりの出土で、35はカマド内出土品である。33の底部には糸切り痕をとどめる。35は軟質の須恵器である。

土坑墓出土遺物（図29）

3 点並べられて出土したもので、37の 1 点は黒色土器である。いずれもロクロ調整された、底部に回転糸切り痕をとどめる坏形土器で、焼成はあまい。

包含層出土遺物（図29）

遺構外の出土遺物を一括して報告する。種類に黒色土器坏（39～43）・椀（44）、土師器鉢（45）・甕（46）、灰釉陶器椀（47）、須恵器蓋（48）がある。坏は、ロクロ調整の黒色土器で、41・43はミガキが顕著である。44は高台のついた椀で、やや外反する器形を呈す。高台部は貼りつけで、底部には糸切り痕をとどめる。45は内湾する鉢で、底部は疑似高台を呈する。47は漬け掛けの灰釉が施される椀。48は約 4 分の 1 が残存するもので、天井部には回転ヘラ削り調整が施されている。

土器の特徴

平安時代の遺物は、種類・量とも決して多いとはいえないが、特徴的な土器があり、編年的にひとつの指標となるものが多い。各住居址と土坑墓出土品について、整理しながら若干の考察を行なう。

H 1 号住居址の坏形土器はすべて底部およびその周辺にヘラ削り調整が施され、回転糸切り痕をとどめるものはない。小型甕も底部とその周辺にヘラ削りが施されている。これに須恵器長頸壺が伴っている。

この様相は、例えば坏形土器に関してみれば回転糸切り痕をとどめる例よりも古いとされ、小型甕も同様である。H２号住居址は指標となる遺物はないが、小型甕形土器は１号住居址に似る。H３号住居址は、鍋形土器を伴うが、胴下半にはヘラ削り調整が施され、１・２住居址と同様相を見せる。これに対して４・５・７号住居址・土坑墓出土坏形土器は回転糸切り痕をとどめた例のみとなり、前者より新しい様相を見せる。以上から１・２・３号住居址→４・５・７・土坑墓と編年され、県内におけるロクロ土師器・黒色土器などの編年観から、絶対年代は前者を９世紀前半、後者を９世紀後半～10世紀前半に位置づけておきたい。

〔引用・参考文献〕

1	北条耕作	1939	『下水内郡北部石器時代分布私見』
2	信濃使料刊行会	1956	『信濃史料』第１巻地名表
3	小林幹男編	1876	『岡峰遺跡発掘調査報告書』飯山市教育委員会
4	児玉卓文編	1977	『岡峰遺跡第２次発掘調査報告書』飯山市教育委員会
5	飯山北高地歴部ＯＢ会編	1977	『遺跡分布調査報告Ｉ』飯山市教育委員会
6	高橋　桂	1977	「考古学上よりみたる栄村」『高井39号』高井地方史研究会
7	飯山市教育委員会	1986	『飯山の遺跡』

写真31　平安時代の焼物

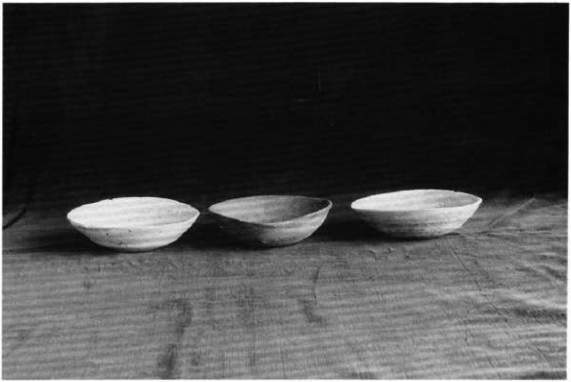

写真32　土坑墓出土坏

Ⅳ 結　　　　語

関田山脈と長峰丘陵に画された外様平は、広井川、日光川をはじめとする小河川によって形成された肥沃な沖積地である。この沖積地を臨んで関田山脈山麓、長峰丘陵に多くの遺跡が存在し、古くから識者の注目の的であった。外様平の水田は、昭和40年代大規模に圃場整備が行われた。当時、飯山地方では埋蔵文化財の保護・保存に対する認識は浅く、数多くの貴重な文化財がブルトーザーの餌食となって私達の視界から永遠に消し去られていった。それは、あたかも自然が完膚なきまで打ちのめされた無残な赤膚を露呈しているのに似たものであった。

圃場整備後、水田のいたる所に土器が細片化し、土壌中にみじめな姿をさらしている状況をみて胸が痛んだものであった。遺跡の所在する丘陵方面の水田においても同様であった。丘陵前面の水田を踏査した折、水田の破壊のすさまじさのみに目を奪われ、周辺の丘陵まで調査する余裕はなかった。結果論ではあるが、この時、丘陵上を調査していれば遺跡の存在を確認できたかも知れない。従って、北条幸作氏が、その存在を予測されたのみで、踏査されていないままに歳月が過ぎていったのである。遺跡の所在が確認されるにいたったのは「岡峰遺跡の調査と歴史」の項で触れているように青少年ホーム建設工事によってであった。

今回の調査結果について概略してみよう。前２回の調査では、縄文前期、弥生中期、土師器等の遺物、遺構が検出されているか、弥生中期が主体であった。今回の調査では、弥生時代の遺構・遺物は全く発見されなかった。恐らく弥生時代の人々にとって、本調査区が住居を営むには適していなかったのであろう。縄文時代の遺物についてみると縄文前・中期の土器は僅かである。ただ石匙はこのどちらかの時期に所属するものであろう。縄文後、晩期の土器が10数点出土している。とりわけ晩期土器は、晩期前半佐野Ⅰ式土器に該当するものと思われ興味深い。飯山地方の晩期の遺跡としては、魚形線刻画土器が出土した秋津山の神、外様顔戸第５、同南木ノ下の各遺跡が知られているのみである。果して晩期の遺跡が本遺跡の近辺に所在するのかどうか今後追求してゆく必要があろう。

出土した土師器は、いずれも平安時代に属するものであって、２時期に区分されることは出土遺物の項すでに触れた通りである。最近の開発に伴う緊急調査で出土する土師器は、そのほとんどが平安時代に属するものであり、該地方が平安時代に急速に開拓されていったことを如実に裏付けている。外様平を中心に平安時代末から中世にかけて所在した〝常岩の牧〟形成と深いかかわりとをもっているものと推定してよいであろう。いずれにしても本遺跡出土土師器が、当地方平安時代土師器編年に重要な資料となるであろう。

次に遺構についてであるが、住居址は合計８軒検出されたが、１号住居址を除くほかは明確でない。望月は「遺構の密度が低く、集落と呼ぶには希薄な感じを受ける」とし、更に住居址についても「遺構がしっかりしていないのが気にかかる」としている。そして、特別な住居があった可能性を示唆している。確かに今回の調査が検出した住居址は、一般的に出土する住居址とは、やや趣を異にしている観も否定できない。そして、平安時代の土壙墓にしばしば埋納される土師器坏が多く検出されていることを考え合せると一般的な住居址よりも祭祀的なものに伴う遺構かも知れないと考えられるのである。

土坑墓は２基検出された。一基には、北側部分に土師器坏３点が並置され、土坑墓南側には配石と思われるものが存在し、若干の焼土が認められた。案外に死者埋葬儀礼に関係する遺構である可能性が高い。

調査区の北西側、東側に検出された溝状遺構は、住居址や土坑墓と無縁でないと推定されるが､どのような性格のものであるか残念ながら明確にし得なかった。今後の研究課題といえるであろう。

末尾ながら本調査について、ご指導をたまわった県文化課、ご協力やら励ましをいただいた地元の諸機関及び関連の皆さまに厚く御礼申上げる。

飯山市埋蔵文化財調査報告　第23集

岡峰遺跡　Ⅲ

平成２年３月25日 印刷
平成２年３月30日 発行

編集･発行　飯山市教育委員会
飯山市大字飯山1.110-1

印　刷　㈲足立印刷所
飯山市大字常郷581-1